

## 2016 年度秋季卒業式式辞

2016 年 10 月 10 日 尾池和夫

今日、京都造形芸術大学を卒業して、学士の学位を得られた芸術学部 20 名の皆さん、通信教育部芸術教養学科の 21 名の皆さん、おめでとうございます。列席の、ご来賓、学校法人瓜生山学園の役員、副学長、研究科長、学部長、通信教育部長、各学科長、センター一長、教職員とともに、学位を受けられたことを、ここからお慶び申し上げます。また、ご家族の皆さま、まことにおめでとうございます。

皆さんは、制作や学習に励んでこられ、学園生活を謳歌してこられたと思います。今日で、京都造形芸術大学卒業生総数 9778 名、通信教育部卒業生総数 5718 名になりました。昨日はここで、瓜生山学園初めてのホームカミングデーが実施され、皆さん方の先輩方がたくさん、世界の各地から集まってきて、たいへん愉しく一日を過ごしました。皆さんも、ぜひ毎年行われる同窓会の行事に、これから参加してほしいと思います。

今日の卒業式を迎えた方たちの中には、最短の 2 年間で卒業式という方が 19 名おられます。通信教育部芸術教養学科では、入学時期が 2 回あり、秋に入学された方は秋に卒業式を迎えます。春入学よりも秋入学の方が人数が少ないのですが、その分、秋季卒業式はアットホームな空気になるのかもしれませんが。

一方では、4 年を超えて長く在学された方もおられます。在学期間は学生さんの事情はさまざまです。海外留学したり、社会で一定時期活躍したり、大作に時間をかけたり、多様な人生が卒業式にはあるのですが、在学中の活動は、それぞれの方の人生にとって意義の深いものであったことでしょう。

今日の卒業式を迎えられた方の論文の中から、2 つの力作を紹介したいと思います。学長賞を受けられた河村勝美さんの論文は「尾張津島天王祭 祭りの継承」という題です。全国に 3000 社の分社がある津島神社の祭礼として知られる夏祭りに焦点を当てて、その成立、背景となる歴史と島津の経済力、他の祭礼との比較を論じ、これからの祭りの継承への提言を述べており、たいへん面白く拝読しました。学科長賞の辻尾晋一さんの論文は「アイヌ木彫りにおけるコンテンポラリーアートの展開」という題です。アイヌの木彫りというと私は鮭をくわえた熊だと思いましたが、この論文ではアイヌ現代作家の作品を取り上げ、民族的な枠を超えた新しい芸術分野の成立を論じました。アイヌは歴史的に人物像を制作してこなかったのですが、ここでは阿寒在住の藤戸竹喜の「ヒグマ（2002 年作）」や「川村カ子ト（かねと）立像」を、また貝澤幸司「幻想（1998 年作）」などを取り上げて、現代アートとしての写実性や表現力を高く評価しています。私は写真を見ていて、人物像の髭や、魚の骨の制作技術と表現力にたいへん興味深いものを感じました。

通信教育部の卒業生の作品はウェブサイトには公開されていますが、それらはご本人の了

承のもとに展示されます。在職のまま学習に努力される方の中には、周囲の方たちに極秘で学習する方がいます。企業の方たちの生涯学習に対するさらなる理解が重要です。日本では、男女共同参画社会の実現や生涯学習の機会の充実などが、法律などもできて進められようとしています。企業や事業所に、まだまだ理解の足りない面が多いのです。例えば、社会人学生の中で大学進学を職場に報告しているのかを聞いた、あるアンケートの結果では、職場には絶対内緒が50%、職場の一部の人のみ知っているが33%、職場周知が17%という結果でした。また、平成22年度の国家公務員採用試験での採用者に占める女性の割合は、ようやく26.1%でした。

教育制度では、在職のままの就学を進めるために通信制や昼夜開講の大学院などを実現できるよう制度の整備が進められています。しかし、最も重要なことは社会全般の理解と協力です。大学の使命は教育と研究と社会貢献です。企業の使命は株主のための利潤の追求と社会貢献です。日本の企業には、この社会貢献の面で、さらに大学への理解と協力を求めたいと思います。日本の未来のためには、企業がもっと積極的に寄付をして大学の教育と研究を直接的に支援するとともに、そこで学習する世界の人びとに積極的に渡しきりの奨学金を支給することが重要です。それによって少子高齢化に向かう経験の先進国である日本が、世界に貢献できる未来を構築することが可能になります。このようなことへの理解と協力を多くの方々をお願いしたいと思います。

今、芸術の秋という言葉のもと、京都市内でもさまざまな展覧会などが行われています。その中で、エジプトから来た黄金のファラオも展示されていますが、エジプトでは4500年以上の長い年月の間ピラミッドの中に眠っていた作品の発掘が続けられています。芸術やデザインの世界の特長は、ある人の作品が永遠に人々に感動を与え続ける力を持つということにあります。私は自然科学を専門にしてきましたが、科学者の発見はその人でなくても誰かが実現するものです。また、技術はその時代の生活に貢献しますが、どんどん改良を加えられて、そのうちに誰が発明したのかわからなくなることも多くあります。しかし、芸術作品はその人にしかできないものであり、そこに大きな価値があります。一つひとつの作品をそのつもりで世に出していただきたいと思います。

芸術文化探求へのとどまることのない研鑽が、人類の未来を希望あるものへ導くと、私も信じて仕事をしています。「芸術立国之碑」にある本学建学の精神をしっかりと受け継ぎながら、この最高学府の伝統を活かし、さらに発展させるよう努力を続けていくつもりです。

皆さんも、卒業した後も将来、機会のある度に母校を訪れ、後輩たちの活動を見守っていただきたいと思います。心身の健康を大切にしてご活躍くださることを願って、私の卒業式での式辞といたします。

おめでとうございます。ありがとうございました。